
モンハンの世界に転生したらニャン子に転生してた。

なちす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンハンの世界に転生したらニヤン子に転生してた。

【Nコード】

N1980BA

【作者名】

なちす

【あらすじ】

神の部下のミスで転生することになった俺はモンハンの世界へ転生したが

アイルー・・・だと・・・！？

はてさてアイルーに転生した俺はどうなるのか！？

転生（前書き）

二作目です。並行して頑張っていきます。誤字脱字あると思います
が読んで頂けたら嬉しいです。

転生

俺こと武内タケウチ 徹はトオル

十二月三十一日

夜

八時三十分

帰り道で

同じクラスの女子に

殺された。

死ぬ寸前に見た彼女の顔は涙に濡れ、背後にある満月が彼女を照らす。

その姿は

美しかった

END

[illegible]

意味わからん！！

ハア！？

年越しをモンハンで越そうとしてたのにつ！！

だいたい可笑しいだろ！？

同じクラスの女子に殺されるって!?

有り得ない！

有り得ない！！

有り得ない！！！！

有り得ない！！！！

有り得ないっ！！！！！！

女子には紳士的な俺が何故同じクラスの女子に殺されなきゃな

らん!!

まさか!?

『小説家になろう』よろしく神の手違いか!?
そうに違いない!!

「あゝ（汗）」

馬鹿な神だ。

神失格だな。

「聞いて下さい（ウルウル）」

まさか本当にそんな神がいるとは思わなかった。

幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ
幻滅だ幻滅だ幻想殺した
なんちつて。

「私の話をk」

ガンダムも見れないし。

万死に値する!!

「私の話を聞いて下さい!!（泣）」

ウオウ!?

敵襲か!?

「敵じゃありません!!死に神のタナトスです!!（泣）」

目の前には背より大きく長い鎌を背負った女の子がいた。

タナトス？

神話に出てくる奴か？

「はい！」

タナトス（爆笑）は笑顔でそう言い返した。

「爆笑つて・・・酷い・・・（泣）」

おつといけない。紳士的な俺が例え神（大爆笑）でもレディとして扱わなければ・・・。
死んでしまったことに混乱してしまったが故の過ち。

「いえ。いいんです。殺してしまったのは私達、魂管理局の責任です。部下がミスをしてしまったから貴方は・・・。」

タナトスはボロボロと涙を流しながら言った。

まあ、いいことあるって。うん。（ぼーよみ）

「貴方は紳士なのか紳士じゃないのかハッキリして下さい（泣）」

へいへい。

「本当にわかってますか？」

HEY！HEY！

「わかってない!？」

一時間経過

つまり転生先とチート能力を言えば良かと。

「はい。そうです。」この一時間の八割は馬鹿な事をしていた俺達だった。

それでは
モンハンの世界へ

「はい。モンスターハンターの世界ですね。（メモメモ）」

チートは

技術力が欲しい。

体力多めでニュータイプのような力が欲しいくらいかな？

「わかりました。他は何かありますか？」

後、記憶は消さないでよ。モンハンの世界の文字の読み書きは出来るように。

「わかりました。」

ボタンとメモ帳をたたむタナトス。

「準備はよろしいですか？」

ああ。

「ではいつてらっしゃーい！」

俺は意識を失った。

どうも。

クリスです。

いい名前でしょう？

けどね・・・。

「今日も可愛い子供達は元気だニヤ。」

「そうだニヤ。」

アイルーに転生かよ!!

こうして俺はアイルーとして生活することになった。

転生（後書き）

果たしてクリスはどうするのか？
次回は時間が飛びます。

感想・アドバイスを待ってます。

日常（前書き）

主人公設定

学力は普通の高校三年生だがスポーツは桁が違う。将来オリンピックに出ようと体力作りに必死だった。

後は発想が豊かでなんでも思いつくが技術力が無く人より多く練習しないと自分の発想をものに出来ずにいた。

モンハンやガンダムが大好きな紳士（？）である。

転生してからあることをキツカケに理不尽から護るために闘う事を誓う。

設定が長くなりましたがどうぞ！

日常

溪流

ケルビは逃げていた。

アレは突然現れ一緒にいた仲間二頭を射ぬいた。

故に訳もわからずケルビは全力で逃げていた。

走る

走る走る

もつと遠くへ・・・

そしてケルビは気づく。

何故視界がぼやけているのかを・・・。口の中が血の味でいっぱいなのかを・・・。

嗚呼・・・。やられたのか・・・。

そしてケルビは絶命した。最後に木から降りてくる片腕に小さな弓を装着して両手首に変なものを装着した一匹のアイルーを見ながら・・・。

百発百中！！今日も絶好調であるっっ！！

あ、ども。アイルに転生したクリスです。

アレから数年経ちました。今は村の警備やお肉確保を任されてる。村にはアイルやメラルーしかなくて村の皆と自給自足の生活をしてます。

因みに今ケルビを追うのに使っていたのは俺が頑張って掘り出した硬く、柔軟性が高い鉄鉱石で造った『アンカー』否、『ニヤンカー』だ。

ゼルダの伝説を思い出して造った代物で、俺ってばアイルだから軽いじゃん？もう使い勝手が良すぎて移動手段や武器としても愛用してます。（ドヤア）

弓はテイルズよろしくティ○レイの使っている武器を造りました。もし、モンスターに接近された時を想定して造りました。モンスターの接近を許した時、弓に付けている隠し武器を使い近接攻撃をします。隠し武器は短剣です。（ドヤアドヤア）

だがここで疑問が生じる。なんでこんなに力があるのだろうか？体力はチートで上がったが力はそんなにはず……。

そう疑問に思ってた時期がありました。

思うに、タナトスに頼んだ事を思い出して頂きたい。俺は

記憶もそのままに

と言った。

理解しただろうか？

つまりは

俺の脳内の記憶も引き継ぐと同時に身体の記憶も引き継いだのだ！
なんとも有り難い誤算だ。ちゃんと有効活用してる。

「クリス〜！」

おう？そうだった。説明してなかった。俺はこの世界に来て好きな
アイルーが出来て今では同棲している。

「リンカかニヤ。どうだったニヤ？木の実とハチミツは？」

「もう大量にあったニヤ！途中ケルビの死骸があったから回収して
きたニヤ。」

リンカの後ろには一輪車を引っ張っている二頭のガーグアが目に入
った。

「よし！後はコイツを載せて村に戻ろうニヤ！」

俺はケルビを一輪車に乗せてガーグアに乗り、リンカも乗ったのを
確認して村にむけて発進させた。

村は元々人が住んでいたらしく木が生い茂っている。工房もあり武
器や農具に家具を造ったりしている。村長の家の地下には開かずの
扉があり、調べているがわからずにいる。総計六十匹が住んでいる
村だ。

「そっいえば本当にいいのかニヤ？オトモアイルーとして出世しな
くて？」

リンカは自分を責めながら言った。

「いいんだニヤ。俺はリンカがいるこの村で一生を過ごす決めたニヤ……。君と一緒にニヤ。」

「クリス／＼／」

と、惚気話をしていると村についた。

「お帰りだニヤ！今日もいっぱいだニヤ〜。」

こいつはレン。俺と同じで外の警備と肉確保をしている。

「オウニヤ！狙った獲物は逃がさないがモットーニヤ！」

「そういえば村長が探してたニヤ。大事な話があるらしいニヤ！」

リンカは心配そうに見つめてきた。その頭にポンと手をおき優しく撫でた。

「大丈夫だニヤ。多分俺にしか頼めない依頼なんだと思うニヤ。」

「でも……。」

「晩飯には帰って来るニヤ。上手い料理を頼むニヤ。」

俺は村長の家にむかった。

それにしても最近辺りが妙に静かで気味が悪い。ジャギイも見えない。

そう考えると

「よう！兄ちゃん！何か食ってけニヤ！」

この気前のいいアイルはダンチ。コイツの作るおにぎりがとても美味く店を経営している。

「サンキューニヤ。」

好意には甘える俺である。

「クリス・・・気にニヤるか？今の溪流の様子が。」

「ああ。ケルビを見つけたのも偶然だニヤ。静か過ぎて嫌な予感があるニヤ。」

俺は眉を細めながら言った。

「多分だが村長に呼ばれたのはその事もあると思うがニヤ・・・最近隣の村から全く連絡が来ないのニヤ。それもあるかもニヤ。」

隣の村か・・・少し遠いところにアイル達が住む村がある。何故か最近連絡がこない・・・そしてニュータイプの感が告げる。邪気がさ迷っていると。

「ダンチ。一応逃げる準備をしとけニヤ。」

ダンチは真剣な顔で

「わかったニヤ。他の奴らにも伝えとくニヤ。まあ、クリスの言ったことは大半は当たるからニヤ。」

「すまないニヤ。それじゃ、村長のところに行ってくるニヤ。」

俺は立ち上がり、行こうとすると

「村長はカブレライトソードが刺さつてるところを右に行ったところだからニヤ？迷うんじゃないニヤ。」

「子供扱いしないで欲しいニヤ。」

ニヤハハハハ！と笑いながら俺は村長のところへむかった。

目の前にカブレライトソードが見えてきた。これはやはりアイルー達に住みはじめたところからあるらしい。古い物でも頑丈さは衰えてはいない。

俺は右に曲がり村長のいる家についた。

「村長」。入りますニヤ。」

と言いながら入ると村の大事な秘玉を見ている髭がはえたアイルー、村長がいた。

「きたかニヤ。わかつてる通りだニヤ。隣の村から連絡がこないニヤ。何かあったに違いないニヤ。クリス、お前には隣の村へ今晚向かって欲しいニヤ。」

まあ、わかつていたことだ。こうなることは。

「後、逃げる準備をしたほうがいいニヤ。邪気を感じるニヤ。」

「わかったニヤ。気をつけて行くニヤ……。」

俺は家を出た。そして我が家にダッシュで帰った。

俺はリンカの作った料理を味わった後すぐさま荷造りをして家を出た。

「気をつけてニヤ。」

リンカはとても心配そうだった。

「いいかニヤ？逃げる準備はしとけニヤ。俺が帰りが遅くなってても絶対先に逃げるニヤ。大丈夫。すぐ追いつくニヤ！」

そう言って俺はニャンカーを使い渓流を駆け出した。

「ニヤんだ？これ？」

俺は呆然としていた。

村が破壊されていた。

いつまでそこに立っていたかわからなかった。

「だ・・・誰か・・・いるのか・・・ニヤ？」

その小さな声を聞き我に帰った俺は声の聞こえたところにむかった。

そこにはボロボロになったアイルーがいた。

「しつかりするニャ!!」

俺は揺さぶった。

「雷狼竜・・・ニャ・・・。私の事はいいニャ・・・。早く村に・・・。」

アイルーは息を引き取ってしまった。

「オイ・・・!!・・・クツ!早く村に・・・ツ!?!」

邪気が急に我が家のある村に向かっているのを感じ取った。

「マズイニャ!村が!!」

俺はニャンカーを使い近道をしながら溪流を駆けつけた。

村に帰ると俺に待っていたのは

地獄だつた。

日常（後書き）

次回！

クリスに待っていたのは絶望と悲しみと怒りだった。「俺・・・決めたニヤ。復讐ではなく！ハンターとしてでもなく！！俺とこの力^{チート}で理不尽と闘う！！だからリンカ・・・俺・・・行くよ。」
そして対峙する。

雷狼竜と一匹のアイルー（チート）が繰り広げる闘いのゴングが今鳴り響く！！

感想・アドバイスを待ってます！

猫（チート）対雷狼竜（前書き）

ユニコーンのサントラ聴きながら書いてました。

猫（チート）対雷狼竜

辺り一面家屋は破壊されいたところにアイルーやメラルーの死体があった。

「リンカ・・・リンカ!!」

俺は走った！足の裏が痛い。ガラスの破片を踏んだからだ。それよりも!!

リンカは!?

リンカはどこだ!?

俺は走る。

走る

走る走る!

走る走る走る!!

息なんて切れない。疲れなんてない。怪我なんて気にしない!リンカだけでも無事なら俺は・・・!!

俺は我が家に着いた。扉の前にはボロボロになった

「リンカアアアア!!」

リンカが倒れていた。

「リンカ!しっかりするニヤ!!」

声が聞こえた。その声は聞き覚えがある声。愛しい彼の声が・・・。

「クリス?」

「リンカ!!」

嗚呼。彼が泣いている。私は痛みを我慢しながら腕を上げて彼の頬に触れる。

「動くんじやないニヤ!! リンカ!! 動いたら傷が!!」

泣かないで……。私が貴方の帰りをギリギリまで待っていたからこうなったのよ……。

[illegible]

嗚呼。私はもうすぐで死ぬ。その前に彼に伝えなきゃ……！！！！

「クリス・・・。」

「喋るんじゃないーヤ!」

今まで沢山のことがあつたけど……

「復讐に……囚われないでニヤ……。」

私は
・
・
・

「前を……み……て……二……や……。」

貴方の事を一生・
一生・
一生

「愛して・・・。」

愛しているニヤ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・。」

「りんか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・。」

「りんかぁ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・。」

「ッ！！！！リンカアアアアア！！！！」

私は貴方の中で生き続ける。生きて。クリス。

こうしてリンカは死んでしまった。

「復讐・・・かニヤ・・・。」

俺はリンカをベットに運び寝かせる。そして必要な武器を装着して決心する。

「リンカ・・・。俺・・・決めたニヤ・・・。復讐ではなく！ハン

ターとしてもなく！俺とこの力チートでこんな理不尽を破壊するニヤ！
だから……。リンカ……。俺……。行くニヤ！」

俺は邪気を強く感じるところへニャンカーを使っ
て飛びたつた。

雷狼竜ことジンオウガは今無性に苛立っていた。

ハンターが住みかとしていた所を荒らし、追い出したからだ。
苛立ちを無くすため村を破壊しストレスを解消していた。
今もそうである。

あの時の事を思い出すだけでイライラする。

ヒュッ

？

上か？

そう思い上を見ると何もなかった。しかし

ヒュッ

グサッ

何かが胸に刺さり悲鳴をあげそうになった。

人間か！

そう思い前を見ると、もの凄いいスピードで突っ込んでくる大きな武器を持ったアイルーが目に映った。

「ここから……。」

ジンオウガは威嚇しようとしたが刺された所に違和感を感じ見ると刺さった所からワイヤーらしき物が伸びていてももの凄い勢いで巻かれている。視線を戻すとアイルーは目と鼻の先にいた。

そしてジンオウガの腹に取り付いたアイルーは大きな武器を腹に当てて叫んだ。

「ここから……出てけえええ!!」

アイルーは何かを撃ち込んだ。

どうだ!!パイルバンカー試作一号は!!

おう！クリスだ！今、戦闘中だが持つてる武器の説明をさせてくれ！

今撃ち込んだのはパイルバンカー。まだまだ試作品であるが対巨竜爆弾よりも威力は上。改良するには飛竜の素材を使わなければならない！撃つたら撃ち込む方は壊れてしまい一発限りの秘策だ！

ジンオウガの腹から夥しい量の血が溢れ出た！！

「ギオオオオオオン！？」

何が起こったのかわからず泣き叫ぶ！

この隙を見逃さず俺は一気に離れ首の方に飛びのり弓に付けていた短剣を取り出し、俺が『毒テングタケ』と『シビレダケ』を調査した『クリス スペシャル』を入れた壺に短剣を入れて『クリス スペシャル』をふんだんに塗る。

この間三秒

そして

「これでも喰らえ！！」

グシュッ！！

ジンオウガの眼に短剣を刺した！

堪らずジンオウガは悲鳴をあげて暴れようとしたが身体全体が痺れ出して動かなくなった。

俺はニャンカーを使って丁度近くにカブレライトソードを引き抜き空へ投げる！

俺はニャンカーで木に飛び移って行きながらカブレライトソードをまた空高く放り投げて最後にカブレライトソードを掴み回転した。落ちる場所は丁度ジンオウガの首を切れる位置だ！

俺は破壊力をつけるために何回も丁度切れるベストなところになるように調節しながら回転して叫んだ！

「あんただけは………堕とすニヤツ!!」

思いつ切りジンオウガの首にカブレライトソードを叩きつけた

俺は地面に刺したカブレライトソードに村の皆の名前を彫っている。

・・・ダンチ、レン、村長・・・リンカ此処に眠る

俺はリンカに告白した時にプレゼントしたネックレスを首にかけて黙祷をした。

あれから三日経った。

俺は隣の村の墓と此処の墓を造るのに必死だった。黙祷を終えた俺は開かずの扉へ向かった

実話、ジンオウガを倒したあの日・・・村長の家の地下にある開かずの扉に変な玉を入れる窪みを見つけ村の秘玉をはめると開かずの扉が開いた。

中は村にあった工房よりもいい工房があり、倉庫には沢山の種類の鉄鉱石が山ほどあり、テーブルには手紙があった。

『クリスへ。

貴方の願いの他にこんな物も送つてきました。この施設は必ず貴方の力になります。モンスターの素材は自分で集めてください。後の素材はおまけとして付けておきました。在庫は限りがあるので注意して下さい。

貴方の未来に幸せがあらんことを・・・。

タナトスより。』

まったく最高の贈物だ。

リンカ・・・見てくれ・・・。

俺の生き様を・・・。

そしてジンオウガから採取した素材を担ぎ工房の中へ消えていった。

•
•
o

猫（チート）対雷狼竜（後書き）

次回

あれから数年経った。

俺は新しく出来た武器と装備で困っている者達を助けるため動き出す！

インパルスが出てきた時のあのBGMを聞く準備を！

感想・アドバイス待ってます！

行動開始（前書き）

待たせてしまって申し訳ない！

誤字・脱字あったら教えてくれたら嬉しいです。

では、どうぞ！

行動開始

「入るぜい。旦那。」

男はゆつくりと部屋の中に入ってきた。

「それにしても旦那の部屋はいつ見ても凄いなあ。部屋中設計図で一杯じゃないかい。」

男は一枚設計図を拾いあげ、眺めるが頭がパンクしそうになり設計図を元の場所に戻した。

「こんなの造って戦争でもやるのかい？
・・・。」

そういう訳じゃないんだ。旦那。こんなの皆使いだしたら、この世からモンスターもいなくなって人間を殺すための兵器になっちまうからよ。」

男はある設計図を一枚引き抜き

「『ツインバスターライフル』なんてもんを造り上げちまったらそれを巡って戦争が起きちまう。旦那の理論上、ラオシャンロンを頭から尻尾まで貫通する代物になるんだろ？
・・・。」

『保険』・・・ねえ。」

男は頭をガリガリと掻きながら『ツインバスターライフル』の設計図を見た。

「旦那・・・やっぱり・・・」

解つてゐる。旦那。旦那の作製してゐる武器や設計図は誰にも教えない。ここにゐることも。」

男は笑いながら言った。

「あの時、情報屋でもあり運び屋の『レクリス』を助けてくれ、新しいアジトもくれた恩がある。情報は流さない。皆そうさ。俺達は『レクリス』しか居場所はない。だから皆旦那を慕っているし、あの墓も毎日綺麗にしてゐる。そして」

男は設計図を置き近づく。

「旦那は『レクリス』の救世主だ。」

男はいきなり商売をする時の顔になり

「旦那。今日の朝、城に帰る途中の第三王女が馬車の中にいないことが判明した。王女はモンスターの生態の話になるといってもたつてもいられない性格らしい。此処、溪流付近でメンバーがハイヒールの跡をみつけた。」

淡々と男は話す。

「ハンターズギルドに依頼を申請してハンター達が探し回っているがハイヒールの跡があった所にはまだ探していない。むしろ見当違いの場所を探している。」

話し終わると真剣な顔で

「旦那。今だと思っぜ。動く時は。」「まさか・・・ジャギイ!？」

私は慌てない様にして見晴らしのよいところへ行こうとしたが

「ギャア!ギャア!」

と私を見ていたジャギイが鳴き出した。

すると目の前には

「そんな・・・!？」

ジャギイやジャギノスが沢山おり、私はすぐさま囲まれてしまいました。

私の好奇心旺盛な故の過ち。その過ちを犯した罪はとても残酷なものだった。

一匹のジャギイが私にむかって襲いかかる。

逃げ場なんてない。

私は・・・喰われるしかない・・・。

私は目を閉じもうすぐ来る痛みに恐怖し、震えた。

「また罪の無い者を襲うニヤか！あんた達はっ！！ニヤッ！！」

剣を構えると刃が無いところから碧色の稲妻の線が顕れた。

そしてアイルーはアイルーとは思えない脚力でジャギイ達に突っ込んだ。

私はアイルーが剣を振るう姿に見とれてしまった。そのアイルーの姿はまるで数多の強豪と闘い貫いた騎士の姿だった。

私はアイルーの背後から襲いかかろうとするジャギイをみて『危ない！！』と叫ぼうとしたら

アイルーはまるで背後から襲ってくることを理解していたかのように思いつ切りジャンプし、下を通り抜けるジャギノスに連結した剣を分離させ片方を投げつけた。

「グギャッ！？」

剣はジャギノスの背中を貫通した。

すかさずアイルーはジャギノスに刺さっている剣を持ち力一杯頭まで真つ二つにして二本の剣を連結しまた頭の上で振り回す。

アイルーは最後の一匹を睨むと振り回しながら突撃し、剣を分離させ、剣を逆手に持ち乱舞した。

アイルーは器用にジャギイの頭、腕、胴体、足、尻尾切り裂いた。

私は呆然としてみると、アイルーは森の奥を睨みながらポーチの中を探り始めた。

アイルーはポーチから小さなボールを出し睨んでいた森の方へ投げた。

ボールが地面についた瞬間割れた。肥やし玉か何かのようだがあまりの臭さと目の痛みに気絶した。

「ヤベツ、間違えて肥やし玉とトウガラシ十本分に凝縮したエキスを調査して出来た特製『クリス デラックス』を使っちゃたニヤ（テヘツ）。」

最後にそんな声を聞いたような気がした・・・。

目が覚めると私は城の自分の部屋にあるベットの中にいた。父様や母様、使用人に沢山叱られたが、聞いた話し、私は街道で倒れている所を捜索中のハンターが見つけて現在に至るらしい。

私はまだ、森であつた出来事を話していない。たぶん理解してくれないから。あの出来事は私の頭の中に置いておこう。自分に子供が出来たとき、その子供に物語として話そう。

私はそう考えながら床についた。

「ただいまニヤ。」

オッス！オラ、クリス！ワクワクすっぞ！

冗談はさておき、俺はあれからいろいろあつて、いろいろあつた。

情報屋でもあり運び屋の『レクリス』を故意に押し付けられた罪から救い、ジンオウガに破壊された俺の村にアジトを造ること許す事を条件に、俺がモンスターから剥ぎ取った素材や、これから造るであろう、大型武器を運ぶ事と、食事に墓の手入れ、俺が此処にいる事と、この工房を部外者には見せない、教えない事、いろんな情報を俺に教える事を等価交換としている。

「旦那。早かったな。」

俺の事を『旦那』と呼ぶ男は『レクリス』の頭であるレイブン。俺が信頼している人間だ。

「さて、旦那。忙しくなるんじゃないかい？」

レイブンは笑いながら俺に言った。

「忙しいなんて関係ないニヤ。ただ俺のやりたいようにやるだけニヤ。」

レイブンはそれでこそ旦那だと言いながら

「飯が出来たから上がってこいよ。」

レイブンは俺の部屋から出ていった。

俺はリンカのネックレスを首にかけ部屋を後にした。

行動開始（後書き）

二本の剣はインパルスを思い出してくれたら嬉しいです。

これを投稿する前、主人公の台詞を見返して鼻血が出そうになってしまいました（笑）

作者はポータブルとWiiでしかモンハンしたことないんで、フロンティアとかに出てくるモンスターは出しませんm（——）m

感想・アドバイス待ってます！

叫び（前書き）

レクリスとは隠者という意味です。
では本編をどうぞ！

叫び

あれから俺は動き出した。

時には農村に襲いかかるモンスターを殺し

時には盗まれた大事なものを盗み、持ち主に返したり

時には宇宙に衛星を打ち上げたり

時には無人の小型航空機を造り、操作したり・・・。

えっ？

衛星？無人の小型航空機？

俺の技術力をなめるなよ・・・。

衛星にはジンオウガに引ッ付いてた超電雷光虫を使っているし太陽光発電出来るようにもしたため電力不足にはならない。鉱石をふんだんに使ってなんとか打ち上げが成功した。

これにより衛星通信が可能となり、俺の村・『レクリス』を本拠地に各地にいるレクリスのメンバーに連絡を容易に出来るようになった。今、試作中だが月の近くにまた衛星を打ち上げようと思っている

る。

「月は出ているか？」

という台詞を・・・げふんげふん。

無論、こんな話しはレクリスだけだ。

ギルドの連中に話すのは気が引ける。それに、レクリスは情報の仕入が早く・詳しいが売りなのだ。レイブンに相談したら勿論反対してきた。それに

「旦那。そんなオーバーテクノロジーは絶対俺達しか使えない。あんな連中に話して提供しても壊すのがオチだろう？」

だそうだ。

因みに、造る時は躊躇した。本当にこんな世界に似合わないものを造ってしまつていいのだろうか・・・。

だが、もしあの時の村のようになる村があるかもしれない。

これはモンスターに限った話ではない。人間もそうだ。最近、貴族の連中がどんどんモンスター達が住んでいる場所に別荘を建てるためやらなんやらでモンスターを追い出すもしくは殺したりしている。他にも別荘があるにも関わらず・・・な・・・。さらには村に住んでいる人間でさえも追い出す。

正直言つて

腐ってる

俺には解る。人間やモンスターの『負』の感情が・・・。

だから俺は造った。小型航空機も衛星も・・・。

レクリスの皆と協力してモンスターと人間の両方が平等に生活出来る世界に近づけるために・・・。

「旦那！！火山にいるメンバーから連絡がきているぜ！！大至急だそうだ！！」

大至急！？まさか！？

俺は通信室へとむかった。

「青い熱線を出す炎伐竜・・・かニャ？」

はい！火山付近に住むアイルー達から聞いた情報で確認しに見に行ったら丁度アグナコトルとウラガンキンが闘って・・・いや・・・アグナコトルがウラガンキンを襲っていました。

火山にいるメンバーの声は恐怖で震えていた。

アグナコトルの奴急に動きを止めたと思ったら胸がオレンジ色から青色になり始めてそして青い熱線を出したんだ！！あれはウラガンキンごと貫通してしまった！！そして俺達はヤバイと思って帰ったんですが・・・。

だんだんとメンバーはガチガチ歯を鳴らし始め言った。

奴は・・・3キロ離れた所にいる俺達を睨んでました・・・。するとメンバーのひとりが急に震え出して呼吸困難にまで陥って・・・。

まさか・・・プレッシャーか！？

「旦那！！こいつを野放しにしたら！！」

メンバーの皆は一斉に俺を見た。

「衛星からもアグナコトルを見つけました！！まだ胸や口は青く変色しています！！」

衛星からも奴の姿を捉えた。俺達はその映像を見るとメンバーから化け物か！？とか声が聞こえた。

憎い・・・

「ッ！？」

俺はソレを見ていると急に頭痛と声が聞こえた。

「！？旦那ッ！？大丈夫か！？」

レイブンは俺にかけより身体を支えてくれた。
すると

「！？そんな！こっちを見ている！？」

アグナコトルは衛星がある方向をジッと睨んでいたのだ

憎
い
・
・
・憎
い
・
・
・

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い
憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い
憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い
憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い

泣いていたんだ・
・

叫び（後書き）

次回予告

俺は他の兄弟より頭がよかった。ソレを母さんから褒められることが俺は大好きだった・・・。

「教えてくれニヤ！！いったい何があったんだニヤ！！」
俺の目の前に映ったのは・・・

「
！！！！！！」

「やめろおおお！！ニヤッ！！」

貴方は私の自慢の息子・・・。
だから・・・生きて・・・。

次回『哀しい闘い』

感想・アドバイス待ってます！

哀しい闘い（前書き）

テスト勉強してて更新遅れたm（――）m

哀しい闘い

俺は他の兄弟より頭がよかった。

本能で動くとか

すぐ怒ったりとか

むやみに闘わないとか

とにかく他の兄弟には欠けている部分を俺は持っていた。

欠けた部分とは違うな。

うーん・・・。

本当はなくてもいい機能を俺は持っているという事かな？

俺が物心がついた時にはもうこつこついう風に頭を使って狩りをしていた。

母は喜んだ。

俺は母が喜んで褒めてくれることが大好きだった。

俺は決意した。

家族を護ると・・・誓ったんだ。

なのに・・・

狩りから帰ったら・・・

「おいおい。まだいんのかよ。」

ドウシテ？

「こいつら親子なんだろう？まあ、サッサと終わらせてたんまり報酬貰おうぜ。」

ニンゲンノウシロニ

「うし。じゃ、一狩り行くかい？」

キョウダイガタオレテイルンダ？

「恨みはないが・・・狩られる」

「ッ！！！！」

カバリと起き上がる

またあの夢を見てしまう。だんだんと怒りがます。
人間を殺す。

そして取り戻す。

俺達の家を・・・！！

キイイーーーーン

俺は上を見ると理解した。あの時、俺のプレッシャーに潰されかけた背中に筒のような物を二つ担ぎ腰には二つ銃を携帯し、両手に銃を持ったアイルーが小さな空飛ぶ鉄の塊に乗ってむかってきた。

すみません調子こきました。

と思ひまして恐る恐る鏡を見ると禿げてなく

と喜んで調子こきました。鏡を見るのに30分時間がかかり、喜ん

1時間も無駄な時間を使った・・・。

アレ？頭が？スッキリしてる？まさか？禿げた？・・・とね。

なのに皆から頭おかしいとかいい医者紹介するからとかもう……

いや変猫扱いか。

[illegible]

真面目にやりますか。

夢でアグナコトルが体験した事を見た。レクリスからの情報を合わせて説明すると

アグナコトル達の家がある所に貴族が別荘を造ると言いだし回りにいるモンスターを根こそぎ倒したということだ。

因みに母が貴族のペットとしているらしい・・・。

ろくに餌も与えておらずヤバイ状態らしい。

俺はあのアグナコトルをなんとかするために、レクリスのメンバーはその貴族をどうにかするために動いている。

何故アグナコトルをなんとかするか？

決まっている。

今奴はその貴族の別荘にむかっている。しかも別荘には貴族が雇ったG級のハンターが四人いる。

なんとかアグナコトルを止めて穏便にすごしたいから俺が足を止める役をやることになった。

因みに、武器・防具は換装出来るように仕組んでいる。今は遠距離から攻撃できる装備でいる。

「なんとしても止めなくてはニヤ。」

俺は超電雷光虫を内蔵して造ったビームガン二丁を構え撃つ！

「もう止めるんだニヤ！そんなことをしても何も残らないニヤ！！」

俺は撃ちながら叫ぶが

「

！！」

相手は器用に俺の乗っている小型航空機『シルエットフライヤー』に熱線を短く撃ち迎撃する。

避けて撃つ。避けて撃つ。の繰り返しでは埒がない。

俺は背中に背負っている二つの筒をアグナコトルに向けてボタンを押した。すると筒の蓋が開き、中から爆弾造るのが大好きなレクリスのメンバーのひとり、リル先生に造って貰った誘導性のある小型タル爆弾を放った。

リル先生いわく、大タル爆弾より威力は強いらしい。

ズドドドーン！！

全弾命中！

が、煙りが晴れると青く光る胸をしたアグナコトルがボロボロになりながらも熱線を撃とうとしていた！

「ニヤ！？」

俺はシークレットフライヤーに積んでいた試作高雷電長射程ビーム砲を取り出し撃つ！！

ズギャアアーーーー・・・

とビームと熱線の競り合いになった。

熱線が出なくなったと同時に武器から煙りが出てきてうんともすんとも言わなくなった。

アグナコトルはフラフラとしながら次は貴族達にいる方角へ撃とうと準備し始めたため俺は降りて走り出す！そして無線で

「レイブン！！ソードシルエット！！！！」

シークレットフライヤーの下の部分から俺の愛刀エクスカリバーを落としてもらい掴みシルエットフライヤーにニャンカーを射出して宙ぶらりんになりながらもアグナコトルにむかって突撃してもらう！

「

！！」

「止めるおおお！！ニヤッ！！！！」

俺はアグナコトルの口にエクスカリバーを突っ込むが防がれる！！

「ウオオオオ！！！！」

諦めるか！と思い踏ん張るが突然何かを感じた。

「まさか！やはりコイツもニュータイプかニヤ！？」

俺とアグナコトルは意識を失った。

「何故邪魔をする。」

こんな事をしても何にも残らないからだ。

「人間は兄弟を殺し挙げ匂母さんを捕らえ奴隸のように扱っている
!!」

それでもダメだ。

「俺は・・・!!」

『もう・・・いいのよ』

「っ!? 母さん!？」

『私はもう・・・助からないから』

「そんな!？」

『貴方は生きて。復讐に囚われずに』

「母さん!!」

『可愛い猫さん。息子を殺さないであげて』

ああ。勿論。

「母さん!!」

『貴方は・・・私の大好きな息子・・・。
だから・・・生きて』

「かあ・・・さん・・・」

『ああ・・・暖かい・・・これが猫さんの世界ね・・・息子を・・・
頼みますよ・・・』

「母さん!!」

『サヨウナラ』

そこで対話は途切れた。

「それにしてもいいんですかい？旦那？」

「なんだニヤ？」

「アグナコトルをレイブンのメンバーにして？」

あの日、俺はアグナコトルと和解してレクリスのメンバーがなんとか買い取ったアグナコトルの母の亡きがらを埋めた。そしてアグナコトルは俺達に協力してくれるらしく俺の計画はかなり進んでいる。対古龍戦専用『ツインサテライトキャノン』を頑張って造ってる。今アグナコトルは火山で待機している。

「大丈夫だニヤ。彼も積極的に協力してくれるしニヤ!!」

レイブンは肩をすくめた。

「まあ。火山にいるメンバーが賑やかになるから良いんだけどな。」

二人はげらげら笑った。

さあて、忙しくなるぞ!

俺は工房の中へとルンルン気分が入っていった。

哀しい闘い（後書き）

次回『日常』

感想・アドバイス待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1980ba/>

モンハンの世界に転生したらニャン子に転生してた。

2012年1月13日17時54分発行